

日本の中高校生における道徳的志向性の変化および 創造的態度との関連

山口洋介^{*1}・智原正行

要 旨

今日、道徳の時間が教科化されるなど、日本における道徳教育への関心が高まっている。本研究では、中高生における道徳的志向性に関する実態を把握するとともに、道徳的志向性と創造的な態度との関連性について検討することを目的とした。分析の結果、道徳的立場の理想主義や道徳基盤の一部の側面に関して、中学生から高校・高専生になるにつれて低下する傾向にあることが示唆された。また、創造的姿勢との関連性について思考スタイルの観点から検討を行ったところ、道徳的立場に関して、立案型・順守型・評価型の3つの思考スタイルとの間で正の相関が見られ、理想主義は順守型との間で相関が比較的高いものに対して、相対主義は立案型および評価型との間で相関が比較的高いことが示された。道徳基盤に関しては、個人の尊厳と義務などへの拘束の双方が、3つの思考スタイル全てとの間で正の相関を有していることが明らかにされた。

Keyword : 道徳的立場, 道徳基盤, 思考スタイル, 創造性, 中高生

1. はじめに

1-1 背景

近年、日本の道徳教育は、大きな変わり目を迎えている。いじめ問題への対応の必要性が高まりを見せたことを契機として、現実に直面する種々の困難な問題に対して主体的に対処する能力の育成を目指し、学習指導要領の改正がなされた¹⁾。道徳の時間が教科として位置づけられるようになり、小学校では2018年度より、中学校では2019年度より、「特別の教科・道徳」（道徳科）の本格的な実施が始まった^{2,3)}。高等学校では、独立した科目は設けられないものの、公民科における「倫理」や2022年に新設される「公共」、また、特別活動の授業を中核としつつ、学校の教育活動全体を通じて、道徳教育の充実を図ることが打ち出されている⁴⁾。そうした大枠が掲げられる一方で、授業内容や授業方法といった実質的な部分については、これから時間をかけて議論を深めることが必要であり、実際の授業実践のなかで得られた知見を基にしながら、より望ましい形を構築していくことができるかどうか問われている。

道徳教育のあり方について検討するうえで、一つの大きな手がかりとなるのが、学習者の実態を反映したデータである。例えば、児童・生徒を対象として、道徳的判断能力の発達の変化を調べた研究^{5,6)}のほか、規範行動⁷⁾や愛他行動⁸⁾、共感性⁹⁾などの発達の変化に着目した研究が、これまでに見受けられる。しかし、道徳そのものに関する意識、いわば道徳的志向性に関しては、これまであまり焦点が当てられてこなかった。

研究自体が行われていても、大学生もしくは成人を対象とした研究がほとんどであり、児童や生徒を対象とした研究はなかなか見受けられない、というのが現状である。道徳的判断能力であれば、脱中心化したり脱慣習化したりといったように、より高次のあり方へと一方向的に発達していくことが想定されている^{10,11)}のに対して、どのような道徳的志向性を有しているかということは、価値観における個人差のようなものであり、通常、望ましいあり方や方向性といったものは想定されない側面である。道徳に関して、どのような見方・捉え方をしているかは、学習者の実態を把握するとともに、道徳教育がもたらす影響を検討するための指標の一つとして興味深いと考えられる。そこで、本研究では、中高生を対象に、道徳的志向性のなかでも道徳的立場と道徳基盤の2種類に着目して、検討を行うこととする。

1-2 道徳的立場とは

道徳的なふるまいに関する議論において、互いに自分のなかでは正当な意見を主張していると思っけていても、いつまで経っても話し合いがかみあわず、平行線をたどるといことはよく見られる。これには、道徳的判断に関わるシステムの違いが関係していると推測される。道徳的判断が求められる場面では、理性的・論理的な思考も行われているが、その背後のより意識されにくい部分では、各自がそれまでに築いてきた一種の直観的なシステムが働いている。そのシステムには多くの要素が含まれ、個人差を生じさせているが、

^{*1} 大阪大学大学院人間科学研究科

基礎的な要素の一つとして指摘されるのが、「結果への関心」と「原則への関心」である¹²⁾。つまり、行動の結果が他の人々にもたらす影響についてどのくらい考慮するかという観点と、原則を守ることについてどのくらい考慮するかという観点である。

Forsyth¹³⁾は、それぞれを「理想主義 (idealism)」と「相対主義 (relativism)」という名称で呼び、その程度を測定するための「道徳的立場尺度 (Ethics Position Questionnaire: EPQ)」を開発した。理想主義が高いことは、他者を傷つけることは常に避けるべきだという見方を表しており、どんな行動であっても、他者に少しでも不利益をもたらすのであれば認めるべきではないと判断する傾向にある。それに対して、理想主義が低いことは、他者への害を許容する見方を表しており、善を生み出すためには、誰かがいくらか犠牲になることは仕方のないことだと判断する傾向にある。また、相対主義が高いことは、道徳に関する普遍的な原則への懐疑的な見方の強さを表しており、道徳的な判断において状況的な要因を重視して判断し、原則や規範を排除しやすい傾向にある。それに対して、相対主義が低いことは、原則や規範に対する信頼の強さを表しており、それらに従うことが道徳的な行動であると捉える傾向にある。

Forsyth¹³⁾は、さらに、理想主義の高低と相対主義の高低をかけ合わせることで、個人を4つのタイプに分類することを提案している (Figure 1)。一つずつ順番に見ていくと、絶対主義者 (Absolutists) は、理想主義が高く、相対主義が低いというタイプである。つまり、誰かが損をするのではなく、皆が幸福になる行動を選択すべきだという高い理想を掲げつつ、同時に、道徳的な原則に関して、例外を認めず、厳格に守るべきだと捉える人物である。状況主義者 (Situationists) は、理想主義と相対主義がともに高いタイプである。つまり、他者に不利益をもたらすことをなるべく避けるべきだと認識しているという点では、絶対主義者と共通しているが、そのためには、状況的な要因も十分に考慮に入れて、原則を柔軟に捉える必要があると捉えている人物である。主観主義者 (Subjectivists) は、理想主義が低く、相対主義が高いというタイプである。つまり、一部の人物にとって不利益が生じることを許容するとともに、道徳的な原則を絶対視せず、状況を考慮しながら、主観的に判断を下す傾向のある人物である。例外主義者 (Exceptionists) は、理想主義と相対主義がともに低いタイプである。つまり、道徳的な原則に信頼を寄せて重視する一方で、皆にとって幸福となるような結果を得ることは難しいと考えており、結果としてもたらされるプラスとマイナスの双方の側面を比較しながら、現実的な形で判断すべきだと捉えてい

るような人物である。

Lu, Quoidbach, Gino, Chakroff, Maddux, & Galinsky¹⁴⁾は、多くの国を訪れたことがある者ほど、相対主義が高くなることを示している。そのように、道徳的立場は個人において固定的なものではなく、経験してきた内容や教育などによって、変化しうるものだと考えられている。

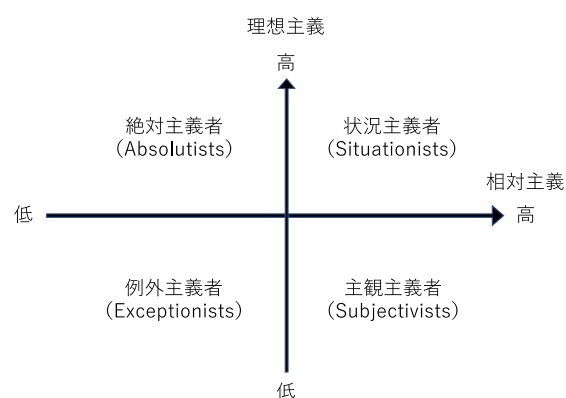


Figure 1 道徳的立場に関する個人の分類¹³⁾

1-3 道徳基盤とは

道徳基盤理論 (Moral Foundations Theory: MFT) は、個人や集団、文化の間での道徳的な関心の違いを記述しようとする理論である。Haidt & Graham¹⁵⁾は、道徳性に関する従来の議論が、危害に関することと公平性に関することの2つの側面に偏っているという点を問題視し、その他のより広範な側面についても注意を向けるべきだと主張した。そして、道徳性の基盤となっている内容について、さまざまな観点から検討し直すことによって、5つの側面から捉えることを提案した。つまり、「危害／配慮 (harm/ care)」, 「公平／互惠 (fairness/ reciprocity)」, 「内集団／忠誠 (ingroup/ loyalty)」, 「権威／尊敬 (authority/ respect)」, 「純粋さ／神聖さ (purity/ sanctity)」の5つである。これらの各側面をどれくらい重視するかを測定する尺度として、「Moral Foundations Questionnaire (MFQ)」が Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto¹⁶⁾によって開発されている。

道徳基盤の高さは、認知能力と関連することが指摘されている。Kawamoto, Mieda, & Oshio¹⁷⁾では、20歳から70歳までの成人4863名を対象として得られたデータの分析によって、「危害／配慮」, 「公平／互惠」, 「純粋さ／神聖さ」の3つの道徳基盤が、認知能力の高さとの間で正の相関を有していることが示された。さらに、「内集団／忠誠」と「権威／尊敬」の2つは、およそ50歳以下の者においてであれば、有意な正の相関が見られることが示された。道徳基盤は、基本的

に生得的なものだとされるが、社会的な学習によっても変化する余地があり、認知能力の高い者ほどそうした学習が進みやすいために、こうした結果が得られたのではないかと推測されている。また、村山・三浦¹⁸⁾では、18歳以上の男女855名を対象として、道徳基盤と政治的立場との関連性について検討が行われた。その結果、「危害／配慮」と「公平／互惠」の側面は、政治的立場との間で関連が見られなかった一方で、「内集団／忠誠」、「権威／尊敬」、「純粋さ／神聖さ」の側面は、それぞれの得点が高くなるほど、保守的な政治的立場を選好しやすいということが示されている。

1-4 本研究の目的

本研究では、第一に、道徳的志向性に関する内容として道徳的立場と道徳基盤の2つの側面に着目し、中高生を対象にデータを収集することを目的とする。これによって、中高生における道徳的志向に関する実態を調査するとともに、中学生から高校生にかけての発達の変化について探索的な検討を行う。どのような道徳的立場および道徳基盤を志向するかという点には、文化差があることが知られており^{12,16)}、他国で得られた結果が日本にもそのまま当てはまるわけではない。やはり、日本人を対象としたデータおよび知見を少しずつ積み重ねていく必要がある。

さらに、本研究では、道徳的志向性と創造的態度との関連性について検討することを、第二の目的とする。日本の道徳教育においては、何か決められた行動を身につけさせるという形ではなく、「考える道徳」が目指されている。例えば、中学校の学習指導要領では、道徳科の目標として、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」との記述がある³⁾。これは、道徳の領域における創造的な思考力を育成することだと捉えてもよいだろうが、その一方で、道徳性と創造性は対立する可能性のあることが指摘されている^{19,20)}。つまり、創造性は、既存の枠組みからの脱却を促すものであり、道徳的な原則からの逸脱も助長することにつながるのではないかということである。そこで、この点について検討するために、本研究では、創造的態度に関する指標として、問題に対処する際に好むアプローチの個人差である思考スタイル²¹⁾に着目しながら、道徳的志向性との関係性について分析を行うこととする。

2. 方 法

2-1 調査参加者

リサーチ会社にアンケートモニターとして登録され

ている中学生・高校生に対して募集が行われ、それに応じた者からデータが収集された。調査参加者は、全体で222名（女性125名、男性97名）であった。参加者の居住地としては、東京都が36名と最も多く、次に多いのは神奈川県と大阪府の23名であり、その他、日本全国にまたがっていた。参加者のうち、中学生が105名、高校生・高専生が117名（うち高専1年生2名、高専3年生4名）であった。中学生は女性70名、男性35名で、全員が3年生で15歳であった。高校生・高専生は女性55名、男性62名で、年齢は15歳～18歳を範囲として、平均16.83歳（ $SD=0.88$ ）であった。

2-2 調査内容

属性項目 参加者に関する属性として、現在居住している都道府県、年齢、性別、学校種、学年について尋ねた。なお、性別に関しては、男性を1、女性を2としてコーディングを行った。

道徳的立場尺度 Forsyth¹³⁾の「Ethics Position Questionnaire」を参考にしながら、質問項目を作成した。

「Ethics Position Questionnaire」は、理想主義と相対主義のそれぞれを測るための10項目ずつ、計20項目で構成されていた。しかし、回答するのが困難だと推測されるような内容、具体的には、「Moral actions are those which closely match ideals of the most “perfect” action.」や、「There are no ethical principles that are so important that they should be a part of any code of ethics.」、「Different types of moralities cannot be compared as to “rightness”.」といった項目が見られた。本研究では特に中高生を対象とすることから、こうした項目を使用することはあまり適切でないと判断された。また、項目同士で類似した内容が少なからず含まれていた。例えば、理想主義の項目で言えば、「A person should make certain that their actions never intentionally harm another even to a small degree.」と「If an action could harm an innocent other, then it should not be done.」、相対主義の項目で言えば、「Moral standards should be seen as being individualistic; what one person considers to be moral may be judged to be immoral by another person.」と「Questions of what is ethical for everyone can never be resolved since what is moral or immoral is up to the individual.」、「No rule concerning lying can be formulated; whether a lie is permissible or not permissible totally depends upon the situation.」と「Whether a lie is judged to be moral or immoral depends upon the circumstances surrounding the action.」などである。冗長な部分が見られるとともに、9件法で回答を求める形式となっていることは、回答者にとって負担となっていると考えられた。

そこで、本研究では、中高生にとって回答しやすく

より適したものとなるように、道徳的立場について尋ねる簡易的な尺度を作成し、使用することにした。具体的な項目として、理想主義に関しては、「自分の行為によって、他の人の心が少しでも傷つくことがあってはならない」、「ある行為を行うかどうかに関して、もたらされる結果のプラスの面とマイナスの面を天秤にかけて判断することは、道徳的なふるまいとは言えない」、「自分が得をすることであっても、それによって他の人の幸せが損なわれるのであれば、すべきではない」という3項目、相対主義に関しては、「どのような内容が道徳的な判断や行為とみなされるかは、状況や社会によって異なる」、「ある人が道徳的だと考えている行為が、別の人には道徳的でないと判断されるように、何が道徳的であるかという基準は個人によって異なるものである」、「ある行為を規制するために厳しいルールを設けることは、よい人間関係を築くことの妨げとなりうる」という3項目から構成された。回答は、「1: まったくそう思わない」、「2: そう思わない」、「3: どちらかといえばそう思わない」、「4: どちらかといえばそう思う」、「5: そう思う」、「6: 非常にそう思う」の6件法で求めた。

道徳基盤尺度 Graham et al.¹⁶⁾の「Moral Foundations Questionnaire」の日本語版²²⁾を用いた。「関連性」と「判断」という2つの下位尺度が含まれるが、本研究では「関連性」下位尺度のみを用いた。「ある行為が正しいか間違っているかを判断するときに、あなたは次のような点をどの程度考慮しますか?」と教示を行い、各項目への回答を求めた。回答は、「0: まったく関係がない(正しいか間違っているかの判断に全く無関係である)」、「1: あまり関係がない」、「2: わずかに関係がある」、「3: やや関係がある」、「4: とても関係がある」、「5: きわめて関係がある(正しいか間違っているかの判断に最も重要である)」の6件法で求めた。因子としては、傷つけないこと(例:「弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか」)、公平性(例:「一部の人が他とは違う扱いを受けていたかどうか」)、内集団への忠誠(例:「自分の所属するグループに対する裏切り行為があったかどうか」)、権威への敬意(例:「社会の伝統的なしきたりに従っていたかどうか」)、神聖さ・純粋さ(例:「気持ちの悪くなるようなことをしたかどうか」)の5つがあり、それぞれに3項目ずつが含まれた。これらの因子は、さらに上位の因子として、前の2つが「個人の尊厳」、残りの3つが「義務などへの拘束」としてまとめられる。本研究では、主としてこの上位レベルの因子に基づいて検討を行うこととした。また、この尺度には「数学が得意であったかどうか」というダミー項目が含まれており、本研究でもそのまま用いたため、計16項目から構成された。

思考スタイル Sternberg²¹⁾の汎用思考スタイル質問紙を基にして、比留間²³⁾において作成された簡易版を使用した。そのうち、本研究では、思考スタイルの機能的特徴として挙げられている3つの側面、立案型(例:

「何か問題に直面したときは、自分の考えや自分なりのやり方を使って解決する」、「自分の考えや自分なりのやり方を通すことができる状況は好きだ」)、順守型(例:「あらかじめ目標が決められていて、手順がはっきりした仕事は好きだ」、「問題を解いたり、課題に取り組むときは、決められた規則や指示に従うようにしている」)、評価型(例:「ものごとを比較、分析、評価する仕事は楽しい」、「正反対の考え方や対立する意見を検討して、評価しようとする」)について尋ねた。各因子には4項目ずつが含まれていた。なお、革新型と独行型についても尋ねてはいたが、補足的な目的であったため、本研究では報告を省略することとする。「あなたが職場や、家庭、学校において、何かを行うときのやり方に、記述がどの程度当てはまっているか」と教示を行い、「1: まったく当てはまらない」、「2: あまり当てはまらない」、「3: わずかに当てはまる」、「4: やや当てはまる」、「5: わりに当てはまる」、「6: よく当てはまる」、「7: 非常によく当てはまる」の7件法で回答を求めた。

2-3 手続き

リサーチ会社を通して、参加者の募集およびデータ収集を実施した。参加者には、謝礼が支払われた。全てインターネット上で行われ、調査の実施時期は2021年3月であった。

調査は無記名式で実施した。回答に際しては、参加者に対して、途中で辞退することが可能であること、研究成果の公表において個人が特定されるような情報が公開されることはないこと、収集したデータは個人が特定できないような形で一定期間保管されることについて、事前に説明を行った。

3. 結果と考察

3-1 有効データ数

道徳基盤尺度に含まれていたダミー項目に対する選択内容に基づいて、不適切な回答をしている者のデータを除外することにした。道徳基盤尺度の開発者らの運営するWebサイト(<https://moralfoundations.org>)において掲載されている基準²⁴⁾に従い、ダミー項目において、「3: やや関係がある」「4: とても関係がある」

「5: きわめて関係がある」の3つの選択肢のいずれかで回答している者を、回答の信頼性に欠けると判断し、分析対象から除外した。その結果、有効データ数は計191名、うち中学生が87名(女性59名、男性28名)、

高校生・高専生が 104 名（女性 48 名，男性 56 名）となった。

3-2 学校種間における差異

因子ごとに項目平均得点を算出した。その結果を，参加者全体および学校種ごとに Table 1 に示す。加えて，学校種間における差異を検討するために実施した t 検定の結果も，Table 1 に示す。

道徳的立場に関して見ると，理想主義について有意差が認められ，中学生の方が高校・高専生よりも高い値であった。相対主義については，有意差は認められなかった。

道徳基盤に関しては，個人の尊厳は差が有意傾向，義務などへの拘束は有意な差があり，いずれも中学生の方が高かった。より下位のレベルの因子ごとに見てみると，内集団への忠誠および神聖さ・純粋さにおいて有意差が認められ，中学生の方が高い値であった。

思考スタイルに関しては，立案型においてのみ有意差があり，中学生の方が高いという結果であった。

3-3 各変数間の相関関係

変数間の関連性について検討するために，ピアソン

の積率相関係数を算出した。その結果を，Table 2 に示す。

まず，道徳的立場尺度について見てみると，2 つの下位因子である理想主義と相対主義の間には， $r = .07$ と相関がほとんど認められなかった。道徳的立場尺度と道徳基盤尺度の間の関連性について見ると，理想主義は，個人の尊厳との間で $r = .44$ ，義務などへの拘束との間で $r = .40$ と中程度の正の相関が認められたのに対して，相対主義は，個人の尊厳との間で $r = .25$ ，義務などへの拘束との間で $r = .16$ であり，比較的弱い関連性に留まることが示された。

道徳的立場と思考スタイルとの間の関連性について見ると，理想主義は，順守型との間の相関が $r = .31$ と最も大きく，立案型との間には $r = .15$ ，評価型との間には $r = .12$ であった。一方で，相対主義は，立案型との間の相関が $r = .31$ と最も大きく，その後は順に，評価型の $r = .26$ ，順守型の $r = .17$ であった。

道徳基盤と思考スタイルとの間の関連性について見ると，個人の尊厳との間の相関は，大きいものから順に，立案型の $r = .34$ ，順守型の $r = .32$ ，評価型の $r = .28$ であった。義務などへの拘束との間の相関は，大きいものから順に，立案型の $r = .34$ ，評価型の $r = .29$ ，順

Table 1 各因子に関する記述統計および学校種間における t 検定結果

尺度名	因子名		全体	中学生	高校・高専生	t	df	p	d
道徳的立場	理想主義	M	3.85	3.99	3.72	2.14	189	0.03	0.31
		($\alpha = .65$) SD	0.87	0.88	0.84				
	相対主義	M	4.39	4.47	4.32	1.29	189	0.20	0.19
		($\alpha = .49$) SD	0.79	0.82	0.76				
道徳基盤	個人の尊厳	M	3.19	3.31	3.08	1.69	189	0.09	0.24
		($\alpha = .83$) SD	0.93	0.87	0.98				
	義務などへの拘束	M	2.30	2.45	2.17	2.32	189	0.02	0.34
		($\alpha = .84$) SD	0.85	0.88	0.80				
(内訳)	傷つけないこと	M	3.04	3.17	2.94	1.57	189	0.12	0.23
		($\alpha = .69$) SD	1.01	0.96	1.05				
	公平性	M	3.33	3.45	3.22	1.57	189	0.12	0.23
		($\alpha = .72$) SD	1.00	0.93	1.05				
	内集団への忠誠	M	2.21	2.38	2.08	2.16	189	0.03	0.31
		($\alpha = .61$) SD	0.96	0.98	0.92				
	権威への敬意	M	2.25	2.37	2.16	1.57	189	0.12	0.23
		($\alpha = .61$) SD	0.92	1.00	0.83				
思考スタイル	神聖さ・純粋さ	M	2.43	2.62	2.28	2.45	189	0.02	0.35
		($\alpha = .57$) SD	0.97	0.97	0.95				
	立案型	M	4.45	4.66	4.27	2.25	189	0.03	0.33
		($\alpha = .77$) SD	1.21	1.27	1.13				
	順守型	M	4.22	4.23	4.21	0.10	189	0.92	0.01
		($\alpha = .67$) SD	1.11	1.15	1.08				
	評価型	M	4.11	4.28	3.97	1.54	189	0.12	0.22
		($\alpha = .84$) SD	1.41	1.47	1.35				

守型の $r = .25$ であった。道徳基盤尺度のいずれの因子に関しても、立案型・順守型・評価型との間で有意な正の相関関係にあることが示された。

この一方で、年齢と性別との間にも負の相関が見られ、これは年齢が高い人に男性が多いということを示していた。そのため、年齢と各変数との相関に関して、性別の要因が第3の変数として介在している可能性があるとして推測された。そこで、性別を統制変数とした偏相関係数についても算出することにした。その結果を、Table 3 に示す。偏相関分析の結果は、Table 2 の相関分析の結果における関連性と、おおむね一致するものであった。ただ、年齢と理想主義との間の関連性については、 $r = -.13$ と負の有意傾向であったものが、 $r = -.11$ となり、有意傾向ではなくなった。

4. 考 察

4-1 道徳的志向性に関して

道徳的立場尺度について、理想主義と相対主義の間の相関は、 $r = .07$ とほとんど無相関であった。Forsyth¹³⁾ の「Ethics Position Questionnaire」に関するデータにお

いても $r = -.07$ で、理想主義と相対主義が互いに独立していることが指摘されており、妥当な結果であると捉えられた。

学校種間での t 検定の結果に着目すると、理想主義に関して、中学生から高校・高専生にかけて低下することが示された。理想主義と年齢の間の相関係数を見てみても、負の値が有意傾向であった。これは、Forsyth¹³⁾において $r = -.20$ の負の相関が見られたという結果と符号するものであった。Kohlberg¹⁰⁾による道徳性の発達段階では、慣習的な内容を取り入れる段階を経て、より普遍的な原則を自律的に追求しようとする段階へと発達していくことが提唱されている。しかし、小柳²⁵⁾において指摘されるように、現実にはより複雑で、道徳的な判断は、道徳性・社会慣習・個人の自由という3つの領域の間でのせめぎ合いのうでで成り立っている。ゆえに、道徳性の内容自体を理解していたとしても、それに基づいた行動を必ずしもとるわけではない。年齢を重ねるにつれて、個人的な価値観を重視したり、現実に即して例外的な判断を下したりするようになりやすいという傾向が、本研究の結果に

Table 2 各変数間における相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 理想主義	—							
2 相対主義	.07	—						
3 個人の尊厳	.44 ***	.25 ***	—					
4 義務などへの拘束	.40 ***	.16 *	.64 ***	—				
5 立案型	.15 *	.31 ***	.34 ***	.34 ***	—			
6 順守型	.31 ***	.17 *	.32 ***	.25 ***	.29 ***	—		
7 評価型	.12 +	.26 ***	.28 ***	.29 ***	.70 ***	.36 ***	—	
8 性別 (男1・女2)	.15 *	.05	.05	.04	-.16 *	.15 *	-.09	—
9 年齢	-.13 +	-.12	-.11	-.15 *	-.19 **	.00	-.08	-.19 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 3 性別を統制変数とした場合の各変数間における偏相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1 理想主義	—						
2 相対主義	.06	—					
3 個人の尊厳	.44 ***	.25 ***	—				
4 義務などへの拘束	.40 ***	.16 *	.64 ***	—			
5 立案型	.18 *	.32 ***	.36 ***	.36 ***	—		
6 順守型	.30 ***	.17 *	.31 ***	.25 ***	.32 ***	—	
7 評価型	.14 +	.27 ***	.28 ***	.29 ***	.69 ***	.37 ***	—
8 年齢	-.11	-.11	-.10	-.14 *	-.23 **	.03	-.10

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

も現れていると考えられた。また、理想主義は性別との間でも相関が見られ、女性の方が理想主義を有しやすいということであった。道徳性に関する性差は、それほど大きなものではないという見方が主流になりつつあるが²⁶⁾、あらゆる観点が網羅されているわけではなく、理想主義に関して性差が見られるという可能性は十分にある。一方で、本研究の参加者は、中学生では女性の占める割合が高く、高校・高専生では男性の方がやや多かった。そのため、理想主義に関して見られた中高生間における差異は、発達の影響ではなく、性別の比率の違いによって説明される可能性があると考えられた。性別を統制変数とした偏相関分析では、理想主義と年齢の間の相関は認められなくなったことから、本研究からだけでは、道徳的立場に関して発達の变化が生じていると判断することは難しいだろう。この背景としては、今回の参加者に関して、年齢の幅がそれほど大きくなかったという点が挙げられる。Forsyth¹³⁾では、17歳から42歳という幅広い年齢の参加者が対象とされていた。今後、年齢幅を広げるとともに、性別の要因についても十分に考慮することが可能となるよう、より多くのデータを収集し検討することが望まれる。

次に、道徳基盤尺度について検討する。まず、平均値自体に着目すると、傷つけないことに関して、本研究では $M = 3.19$ であったのに対して、Graham et al.¹⁶⁾のデータでは $M = 3.77$ であった。同様に公平性に関して、本研究が $M = 3.33$ に対して、Graham et al.¹⁶⁾では $M = 3.89$ であった。これら個人の尊厳に関わる2つの因子に関して、本研究のデータは低めであることが分かる。それに対して、内集団への忠誠に関しては、本研究で $M = 2.21$ であるのに対して、Graham et al.¹⁶⁾では $M = 2.24$ と、ほぼ同程度であった。権威への敬意に関しては、本研究が $M = 2.25$ に対して、Graham et al.¹⁶⁾では $M = 2.03$ 、神聖さ・純粋さに関しては、本研究が $M = 2.43$ に対して、Graham et al.¹⁶⁾では $M = 1.68$ であった。このことから、連帯を志向する3つの因子に関しては、本研究のデータは同程度かむしろ高めであると捉えることができる。Graham et al.¹⁶⁾は、成人（平均年齢36.2歳）を対象としており、この差異が、参加者の年齢の違いによって生じたものなのか、文化差によって生じたものなのかは判断できないが、興味深い傾向であると言える。また、t検定では、個人の尊厳について有意傾向、義務などへの拘束については有意であり、中学生に比べて高校・高専生において低下することが示された。年齢との間における相関分析および偏相関分析では、個人の尊厳について有意な相関は認められなかったが、義務などへの拘束について、負の有意な相関が認められた。道徳的立場と同様、発達の

変化が示唆される結果であり、さらなる検討がなされることが期待される。

4-2 道徳的立場と思考スタイルとの関連

理想主義・相対主義ともに、思考スタイルの各因子との間で正の相関が見られた。その一方で、値の大きさは因子によってばらつきがあり、理想主義は順守型との関連性が強いのにに対して、相対主義は立案型および評価型との間で関連性が強いという結果であった。規則に従って行動することを好む順守型にとって、他人に悪影響を及ぼすことはどんな時も避けるべきだとする理想主義の考え方は、普遍的な原則としてシンプルで分かりやすく、受け入れられやすいのではないかと考えられた。一方で、自分なりのやり方を考えることを好む立案型にとって、原則を絶対視しない相対主義の考え方は、何をどのように行うかを自分で決めることが求められる状況のため、賛同しやすいのだと考えられた。また、評価型は、物事やアイデアについて分析したり評価したりすることを好むタイプであるが、思考スタイル質問紙の因子構造を探索する研究において、立案型と同じ因子に含まれることが多く、関連性が強いことが指摘されている^{23,27)}。さまざまな角度から検討し本質に迫ろうとするアプローチであるため、相対主義との間で親和性が高いのだと考えられた。

Bierly, Kolodinsky & Charette²⁸⁾においては、質問紙によって測定された創造性に関する指標が、理想主義と相対主義の双方と有意な正の相関を示しており、なかでも相対主義との間の方でより相関が強いという結果であった。また、Khan, Akbar, Jam & Saeed²⁹⁾では、Big 5（主要5因子性格検査）において、知的好奇心の高さや多様性を好む程度を表す因子である経験への開放性が、理想主義に対しては有意ではないが負の偏回帰係数を示した一方で、相対主義に対しては有意な正の偏回帰係数を示した。本研究では、創造性と最も関連が強いと想定される立案型が、相対主義との間で比較的大きな正の相関を示したが、この点は先行研究と一貫した結果だとみなすことができるだろう。

道徳的立場と思考スタイルとの関連性を検討した研究は、これまでのところ見受けられない。そのため、順守型の思考スタイルが理想主義と関連性が強く、評価型の思考スタイルが相対主義と関連性が強いという結果に関しては、比較対象となるような類似した先行知見は見当たらない。どのような道徳的立場を抱くようになるかは、人生において経験してきた内容や教育などさまざまな要因に左右されるだろうが、思考スタイルというより全般的に影響を及ぼす要因によって説明される可能性があるという本研究の知見は、重要な視点をもたらすものである。つまり、道徳的立場の異

なる者が、互いの認識をより適切に理解するためには、道徳に関する議論を深めるだけでなく、その個人の思考の傾向にも目を向けることが必要だということである。

4-3 道徳基盤と思考スタイルとの関連

道徳基盤に関する因子である個人の尊厳、義務などへの拘束はともに、立案型・順守型・評価型の3つの思考スタイルのいずれとの間にも、 $r=.25\sim.34$ の正の相関を示すことが明らかになった。つまり、それぞれの思考スタイルを高く持つほど、個人的および連帯的な志向性が高くなるということであった。3つの思考スタイル全てと正の相関を示したという点は、道徳的立場に関する結果と基本的に同様であった。

順守型は、規則や指示に従うことを好むという傾向であり、個人や集団内の規則を守ろうとする意識が高いことは、想定通りの結果であった。

一方で、創造性と関連の深い立案型、および、評価型に関しては、個人の尊厳とは正の相関を示したとしても、義務などへの拘束とは負の相関関係にあるのではないかと予想された。なぜなら、創造性は、既存の枠組みにとらわれず柔軟に考える能力であり、ともすれば現状の規則や権威に対する軽視につながりやすいと捉えられるためである。例えば、Gino & Ariely³⁰⁾やMai, Ellis & Welsh³¹⁾の研究では、創造的なパーソナリティや、創造的な思考が活性化された状況は、自分の行動を正当化する理由をあれこれと考える能力を高めることで、非道徳的な行動を喚起しやすいことが指摘されている。しかし、少なくとも本研究の結果からは、立案型や評価型は、個人および連帯の双方の道徳基盤の観点との間で正の関連性にあることが示された。創造的な思考スタイルが、連帯的な志向を有することを必ずしも妨げるものではなく、むしろそうした道徳基盤の重要性をより強く認識することにつながっているという結果は、注目に値するものである。確かに、本研究は道徳的志向性について自己報告を求めたものであり、行動レベルでの道徳的なふるまいの有無について説明するものではないが、認識のレベルでは、立案型や評価型も正の関連性を有している可能性が高いと推測された。

5. 本研究の意義および今後の課題

道徳教育の教科化という大きな転換点を迎えている今日において、わが国の児童・生徒を対象として道徳性に関する基礎的データを収集し、実態を把握しながら、教育のあり方について議論していくことが必要である。そうした現状において、本研究の意義としては、次の3点にまとめられる。

1 点目としては、中高生を対象として道徳的志向性に関するデータを収集したという点が挙げられる。道徳的立場にしても、道徳基盤にしても、これまでの研究では主に成人が対象とされてきた。中高生の年代を対象としたデータは、それ自体が資料として貴重である。日本全国の中高生が回答しているため、日本の中高生の平均的な実態が一定程度反映されているものと考えられる。今後、調査対象を、思春期の入り口にあたる小学校の中学年あたりにまで広げるとともに、文化差や性差に関して、さらなる検討が進められることが期待される。

2 点目としては、発達的な変化について検討を行った点が挙げられる。本研究では、参加者の年齢幅がそれほど大きくなかったこともあり、はっきりとした差異が見いだされたわけではないが、中学生から高校・高専生になるにかけて、道徳的志向性全般に関して低下する傾向にあることが示唆された。年齢との関連性については、先行研究とも符号する結果であったが、日本人を対象としたデータはほとんど見られず、日本の学校教育の影響について検討する足がかりとなるであろう。さらなる検証が必要ではあるものの、もし低下することが確かであるならば、例えば、高校になるにかけて、学校の授業で道徳を扱う時間が減少することが関係しているという仮説が立てられるかもしれない。発達的な変化が何を意味しているのか、社会規範や自己に対する認識との関係性を踏まえながら、理解を深めていくことで、道徳教育のカリキュラムマネジメントにとって意義のある知見が得られる可能性が高いと考えられる。

3 点目としては、道徳的志向性との関連性について、思考スタイルの観点に着目した点が挙げられる。思考スタイルは、問題状況に直面した際に、どのようなアプローチで対処するのを好むかということに関する個人差であり、思考全般に影響を及ぼしている。道徳は、互いの利害を考慮しながら、どのようにうまくやっていくかを考えるという一種の問題状況であると捉えることができる。そのため、思考スタイルが道徳的なふるまいの仕方にも影響を与えていることが想定され、今回、実証的に特徴的な関連性が示された。特に、創造性と深い関係にある思考スタイルである立案型が、道徳的志向性との間で正の相関にあるという結果は、重要である。創造性教育において、立案型のようなスタイルを促すことは、規則からの逸脱や集団の和を乱すといった懸念が指摘される場合があるが、本研究の結果からは、そうした懸念はあまり必要がないと言える。また、道徳科の指導方法として、問題解決的な学習を重視することが挙げられているが¹⁾、他者との対話や協働などを通して、新たな問いを生み出し、それ

を主体的に解決しようとする態度や能力の育成を測ることは、道徳的な価値に対する認識を深めることにつながりうると考えられる。

本研究の今後の課題としては、まず、道徳的立場尺度に関する信頼性が挙げられる。道徳的立場尺度に関して、Forsyth¹³⁾の尺度は回答が困難な項目が含まれ、中高生に回答を求めるのは難しいと判断されたため、尺度を修正して用いた。一方で、項目数を各因子で3項目ずつとしたことから、 α 係数が低くなり、相対主義に関して $\alpha=.49$ であった。いわゆる「帯域幅と忠実度のジレンマ」と呼ばれる³²⁾が、内容の幅の広さと信頼性の高さはトレードオフのような関係にあり、両立させることは容易ではない。単純に項目数を増やせば、 α 係数の値自体は高くなるが、その分、回答への負担が大きくなるだけでなく、「同じような項目ばかりだな」と感じさせることで、回答者の集中力や動機づけが削がれてしまい、真面目に取り組んでもらえなくなる恐れがある。そうすると、本末転倒であり、 α 係数の高さだけで可否を判断することは避けるべきである。項目内容の検討はもちろん必要であるが、概念自体の精緻化と並行して議論を進めていくべきである。

また、本研究では、参加者の自己報告に基づいたデータ収集がなされた。道徳性に関しては、特に、その時々場面や状況によってふるまい方が大きく変化することが想定され、自己報告を求める場合には、回答者がどのような場面をその時に思い浮かべるかによって、回答が変わりやすいと考えられる。例えば、道徳基盤尺度の項目は、抽象的な説明になりがちであるため、回答には少なからず困難が伴う。そのため、より具体的な場면을想定させるシナリオをいくつか呈示し、それぞれに関して、どのような主観的な反応が生じていたかを回答させるという形式を併用するというのも、一つの案であると考えられる。社会的望ましさが回答に混入しやすいという問題を含めて、自己報告法における尋ね方について、工夫が必要である。

今回、道徳的志向性に関して、発達の変化が示唆されるデータが得られたが、あくまでも横断的な調査方法であった。今後、発達の変化について検証するためには、やはり長期的な縦断的調査が望ましく、性差についても考慮しながら、より大きなサンプルを対象としてデータを集積していくことが求められる。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 JP18K13236（研究代表者：山口洋介）の助成を受けた。

引用文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編（2017）
- 2) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）（2017）
- 3) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）（2017）
- 4) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）（2018）
- 5) 櫻井育夫：Defining Issues Testを用いた道徳判断の発達分析，教育心理学研究，59（2），155-167（2011）
- 6) 柴田薫：道徳的判断の発達の推移に関する検討．教育心理学研究，23（3），175-179（1975）
- 7) 山田洋平，小泉令三，中山和彦，宮原紀子：小中学生用規範行動自己評価尺度の開発と規範行動の発達の变化，教育心理学研究，61（4），387-397（2013）
- 8) 浅川潔司，八尋義晴，浅川淳司：児童期の愛他行動と共感性に関する発達の研究，兵庫教育大学研究紀要，33，31-38（2008）
- 9) 浅川潔司，松岡砂織：児童期の共感性に関する発達の研究，教育心理学研究，35（3），231-240（1987）
- 10) Kohlberg, L. : From is to ought: How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development. In T. Mischel (Ed.) . *Cognitive Development and Epistemology* (pp. 151-235) . New York: Academic Press (1971)
- 11) Piaget, J. : *Le jugement moral chez l'enfant*. Paris: Presses Universitaires de France (1932)（大伴茂（訳）：児童道徳判断の発達，同文書院（1957））
- 12) Forsyth, D. R., O'boyle, E. H., & McDaniel, M. A. : East meets west: A meta-analytic investigation of cultural variations in idealism and relativism. *Journal of Business Ethics*, 83（4），813-833（2008）
- 13) Forsyth, D. R. : A taxonomy of ethical ideologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39（1），175-184（1980）
- 14) Lu, J. G., Quoidbach, J., Gino, F., Chakroff, A., Maddux, W. W., & Galinsky, A. D. : The dark side of going abroad: How broad foreign experiences increase immoral behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 112（1），1-16（2017）
- 15) Haidt, J., & Graham, J. : When morality opposes justice: Conservatives have moral intuitions that liberals may not recognize. *Social Justice Research*, 20（1），98-116（2007）
- 16) Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. : Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101（2），366-385（2011）

- 17) Kawamoto, T., Mieda, T., & Oshio, A. : Moral foundations and cognitive ability: Results from a Japanese sample. *Personality and Individual Differences*, 149, 31-36 (2019)
- 18) 村山綾, 三浦麻子 : 日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証—イデオロギーとの関係を通して—, 心理学研究, 90 (2), 156-166 (2019)
- 19) Shen, W., Yuan, Y., Yi, B., Liu, C., & Zhan, H. : A theoretical and critical examination on the relationship between creativity and morality. *Current Psychology*, 38 (2), 469-485 (2019)
- 20) 山口洋介 : 道徳教育と創造性教育は対立するの
か?—心理学的観点からの理論的考察—, 人間環境学研究, 19 (1), 41-50 (2021)
- 21) Sternberg, R. J. : *Thinking styles*. New York: Cambridge University Press (1997) (松村暢隆, 比留間太白 (訳) : 思考スタイル, 新曜社 (2000))
- 22) 金井良太 : 脳に刻まれたモラルの起源—人はなぜ善を求めるのか—, 岩波書店 (2013)
- 23) 比留間太白 : 大学生の思考スタイルとテスト選択行動, 教育科学セミナー, 34, 11-17 (2003)
- 24) YourMorals.org collaboration. : Moral foundations questionnaire: 30-item full version (Item Key, July 2008) . Retrieved from <https://moralfoundations.org/wp-content/uploads/files/MFQ30.item-key.doc> (June 26, 2021) (2008)
- 25) 小柳正司 : ポスト・コールバーグの道徳性発達理論と道徳教育—イリノイ大学シカゴ校における道徳教育プログラムの開発—, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 14, 57-68 (2004)
- 26) 山岸明子 : 道徳性発達とジェンダーの問題—Kohlberg & Gilligan 理論再考—, 順天堂スポーツ健康科学研究, 1 (4), 449-456 (2010)
- 27) 落合純, 真家優子, 和田裕一 : 思考スタイル質問紙日本語版の信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 87 (2), 172-178 (2016)
- 28) Bierly, P. E., Kolodinsky, R. W., & Charette, B. J. : Understanding the complex relationship between creativity and ethical ideologies. *Journal of Business Ethics*, 86 (1), 101-112 (2009)
- 29) Khan, T. I., Akbar, A., Jam, F. A., & Saeed, M. M. : A time-lagged study of the relationship between big five personality and ethical ideology. *Ethics & Behavior*, 26 (6), 488-506 (2016)
- 30) Gino, F., & Ariely, D. : The dark side of creativity: Original thinkers can be more dishonest. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102 (3), 445-459 (2012)
- 31) Mai, K. M., Ellis, A. P., & Welsh, D. T. : The gray side of creativity: Exploring the role of activation in the link between creative personality and unethical behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 60, 76-85 (2015)
- 32) Cronbach, L. J. & Gleser, G. C. : *Psychological tests and personnel decisions*. Oxford: U. Illinois Press (1965)

受理 2021 年 7 月 21 日

公開 2021 年 7 月 26 日

<連絡先>

山口洋介

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1 番 2 号

大阪大学大学院人間科学研究科

E-mail : hs5132yy@alumni.osaka-u.ac.jp